

故岡倉覺三氏記念像

故東京美術學校長岡倉覺三氏の記念像は、豫て正木校長横山大觀氏等十名の實行委員によつて計畫せられ、壹萬壹千八百餘圓の贖金を得て美術學校校庭に建設中であつたが、滞りなく完成して舊臘六日除幕式を挙げ、同記念像建設會より學校に贈呈された。

像は日本美術院同人平櫛田中氏の作に成る等身よりも稍大きい全身の青銅像で、故人が校長室で使用了椅子を摸し、當時の學校の制服を着けて讀みさしの書物を片手に倚坐したる、在りし日の宛らに偲ばれる姿に寫されてゐる。敬虔の氣に充ちた忠實な作である。



この記念像のこれ迄にあまり例を見ない意匠は、それを六角の祠堂内に容れたことである。像を雨曝しにすることは特に故人が嫌つてゐて、それもこの設計の動機になつた由であるが、種々の困難が豫想された割合には工合よく出来てゐる。祠堂は東京美術學校講師金澤庸治氏の設計になり、建坪四

坪三合、柱間五尺の正六角形の平面で、總高十七尺五寸、軒高十二尺三寸、木部は總て木曾檜の良材を素木の儘用ひ屋根を銅板で葺いて頂に香取秀眞氏作の青銅製露盤及寶珠を載せる。和様出組で鎌倉初期頃の様式に基いてはゐるが木割其他に可なり自由な手法を用ひ、軒は一軒半繁極とし、間斗束、蟬股其他の裝飾等を用ひず能ふ限りの簡素を旨としたのは、小堂なると、中心の像を妨げぬ爲との用意が見られる。軒の深いこの種の建物で内部の像を暗くせぬ爲には、

背面の間を板張にした外すべて吹放しで、中央に灰白色六角形臺石の上に像を安置する。背後の板壁の面には、故人の著書 *The Ideals of the East* 劈頭の有名な一句 “Asia is one” を令弟岡倉由三郎氏の筆によつて素木の儘に刻んだ。

堂の形もよく、像の和様の姿との調和もよく、新な試みとしては相當の成功を見せてゐて、記念像設計の上に一つの好例を加へたものと云つてよい。難を云へば可なり像が暗く見えることで、これは青銅の黝んだ色が新しい素木の肌の爲に尙暗く見えるせゐるもあり、木材の寂と共にやがてそれ程でなくなるであらうが、或はいつそ像を木彫にして溫雅な彩色を施したならば落つきもよく、殊に岡倉氏の記念像としてはふさはしいものであつたかとも思はれる。

堂の背面には東京美術學校長正木直彦氏の撰文及揮毫を以つて次の銘記を銅板に刻んである。(阜五)

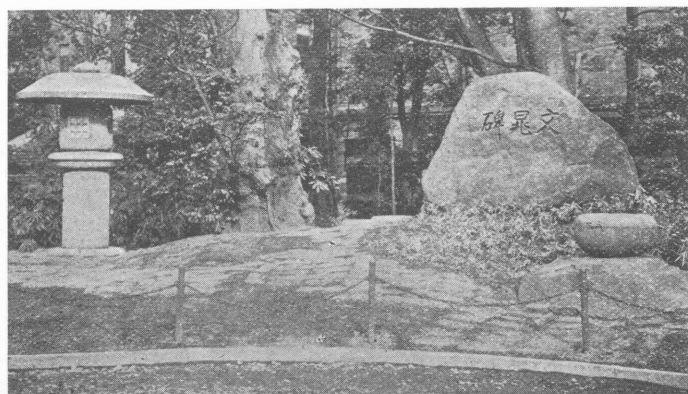
岡倉覺三先生實我邦近代美術復興唱首也東洋美術史審美學之講明美術教育之施設古美術保存之制度兼與我美術海外宣傳志爲先生所創案實行焉明治十三年先生十九歲卒東京大學哲學科業也時恰外國文化陶醉之風彌漫于海內視我美術若土芥然先生敢然蹶起唱道國粹美術優越以覺醒迷夢是爲我邦近代美術復興曙光十八年爲文部省圖書取調掛十九年爲美術取調委員遊于歐米諸國調查美術教育制度二十年歸朝官設東京美術學校先生任幹事二十三年任校長先生創業最碎心就市井畫工雕工金工木工中簡拔鉅匠薦爲教官優遇之自指導誘掖是努以謀其地位向上技術精進在職十年所造就人材頗多横山大觀下村觀山菱田春草其翹楚也此間爲臨時全國寶物取調掛次爲古社寺保存會委員兼帝室博物館幹事於是我邦古美術鑑査調查保存制度始得就緒三十一年共橋本雅邦率大觀觀山春草等創設日本美術院其同人等所作歲時開展覽會公之皆爲先生所指導先生屢渡航于米國爲勃士敦美術館整理東洋美術先生素善英語英文先生在彼土所述作頗多就中英文東洋之理想開卷道破亞細亞是一也其卓見警醒學者頗多英文茶說一書米國美術學校採爲教課書佛獨亦重譯汎布永爲英文學典型矣先生以文久二年生以大正二年九月二日逝享年五十二先生逝而今將二十年先生遺業東京美術學校日本美術院共益紹隆先生遺澤綿々弗絕美術院既有天心靈社祀先生今茲門人故舊胥

謀於美術學校校苑新構祀堂安先生遺像昭和六年十二月六日行除幕式像美術院
同人平櫛田中所造祠堂美術學校建築科金澤庸治所設計監造也而經營董事横山
大觀最致力云 東京美術學校長正木直彦譯並書

文晁碑

最近上野公園の府美術館の南側東端、俗に二本杉と謂ふ一角の地域に、文晁
碑と鐫刻された巨大な自然石が据えられた。

是れは東京の書畫骨董商の主なる人々の組織してゐる七清會同人が企畫した
もので、もと淺草の源空寺の境内に在つた文晁碑が先年の關東大震災で全く粉
碎してしまつたのを惜しみ、三年程前
よりその再建を計畫し、昭和六年十二
月十四日が恰も谷文晁の命日に當ると
ころから、この紀念碑の除幕式を舉行
し、同時に正木美術學校長を會長とし
て文晁遺作展覽會を、當日より十二月
二十日まで府美術館に開催したのであ
つた。



碑石の材は地上高約一五七糎、横約
一八〇糎、奥行約一三〇糎もある筑波
石を用ひ、側面に堅六・八五糎、横三
四・二糎の銅板が嵌入されてある。石
面の題記は徳川家達公の揮毫に成り、
銅板面には左記の如くに、正木校長の
撰文並に揮毫の文晁小傳が陰刻されて
ある。(夏影)

谷文晁先生は近代不世出の畫宗なり寶曆十三年九月九日江戸下谷に生る家世
々田安府に仕へ父本備麓谷と號し詩名あり先生名は正安文五郎と稱す少時學

を家庭に受け旁六法を加藤文麗に學ひて文晁と號す又渡邊玄對鈴木芙蓉に從
遊す壯歲專其風を作る又西洋畫に仿ふ所あり後宋元諸家を祖述し狩野土佐の
風を參して南北合流を以て歸となす畫く所山水人物花鳥蟲魚往くとして可な
らざるなく意匠豐富圖樣清新なること寔に一世の偉材なり就中山岳に長し名
山圖會の名著は永く其範を貽すものにして其居を寫山樓と稱し又樂山と號す
るもの皆之か爲なり先生又畫學の造詣深く畫學大本朝畫纂等の著書多し畫
學齋の號ある所以なり先生資性爽快度量宏潤絶倫の精力と天稟の健腕とを以
て畫技畫學を兼備するもの恐らくは古今に匹儔なかるへし先生夙に松平樂翁
公の値遇を受け公餘探勝集古十種の圖畫石山寺緣起の補寫の如き皆公の命に
依りて成れるものにして先生の驥足を伸へ得たるは實に公の庇護に負ふ所多
し從遊の徒多士濟々竹田杏所舉山靄厓永海草雲は其翹楚なり先生天保十一年
十二月十四日を以て歿す墓は淺草源空寺に在り今や先生逝いて將に百年なら
んとす而も源深きものは流遠し先生の餘澤は今尚綿綿として絶えざるなり茲
に豐碑を上野公園美術館の側に建て先生の功德を記して長へに流風餘韻を欽
仰せんとす

昭和六年辛未四月 東京美術學校長正木直彦撰并書

福原鐐二郎氏の薨去

前帝國美術院長福原鐐二郎氏は、昨年十一月病床に帝展廿五周年紀念式を迎
へた後、院長の地位を勇退され、爾後専ら療病に努めて居られたが、一月中旬
病革まり、同十七日午前零時四十分溘焉として薨去された。享壽六十有五。

福原氏の官界に於ける堂々たる閑歴、特に文部行政に於ける功績は今更賑々
の要を須ひないが、氏の美術界に對する貢獻も亦頗る大なるものがあつた。氏
の美術界に於ける功績に關しては他日稿を改めて詳述する機會を俟つ積りであ
るが、この稿を草する今日（一月十九日）は恰かも氏の斂葬の日に當るが故に
今氏の美術界に對する寄與の大體を略記して追憶を新たにしたい。

福原氏的美術界に關係せられたのは明治二十七年、參事官として奈良縣に赴